



はじめに

柴, 真理子

(Citation)

大學教育研究, 09

(Issue Date)

2001-03

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004665>



はじめに

柴 真理子（神戸大学大学教育研究センター長）

この度、土屋基規前センター長が任期を満了し退任された後をうけ、センター長に就任することになった。

「大学教育研究」は、大学及び大学院における教育・研究の在り方をはじめとして、全学共通授業科目の教育内容、教育体制、教育評価などに関する事項の調査研究を担う当センターの研究部の教員が中心になって、大学教育をめぐる時代を超えた普遍的な課題や現代的な課題に取り組んできた1年間の研究成果の一端を公表するものである。

当センターでは、平成12年度のすべての全学共通授業科目を対象に、学生と教員による授業評価を行った。後期分については、現在、分析中であるが、前期分については、その結果を担当教員に通知すると共に、それぞれの教科集団でその結果について厳しく自己評価を行っている。このような担当教員への通知、自己評価は、少なからず授業の充実に益するであろう。

ところで、平成11年度の「大学教育研究」をとりだしてみると、そこには「評価」をテーマにした論稿が多くみられ、本年度の神戸大学の学生と教員による授業評価に先んじて、それに関する研究がなされていることがわかる。すなわち、この「大学教育研究」に掲載された研究成果は研究にとどまらず、実践に移され、実際の大学教育の改善・充実と有機的に繋がっていると見えよう。

本年度から大学評価・学位授与機構による評価が始まることとなった。本年度の全学テーマ別評価「教養教育」では、教養教育の目的及び目標、教養教育に関する取り組み等の実情を回答することになっている。本年度は実情調査であり、それがすぐに評価に繋がるものではないが、これを契機に、本学でも全国的な大学教育の動向を視野にいれながら、本学の個性を生かした大学教育を実践するべく、研究部の教員を中心にした大学教育研究を進めると共に、そこでの研究成果を実践にうつすことを可能にするために、全学的に取り組んでいかなければならない。

さて、それでは、本年度の目次から、研究成果にどのような特徴を見出すことができるであろうか。

今回も恒常的に取り組まなければならない授業の改善に関する具体的研究がみられ、更に、論稿及び研究集会の記録から、外国における大学教育に関するテーマが多くみられる。

近年の大学教育の改革は国際的な動向であり、国内のいずれの大学も当然、外国における大学改革の動向に目を向けていると思われる。そのような中で、神戸という国際都市にあり、「国際社会に貢献できる人間」の育成を目指す本学は、諸外国の大学教育を実際に見聞し、情報を交換しながら、大学教育の質を高めるための具体的な方策を不断に考えていかなければならない位置にあると言えるであろう。

今回の紀要は、このような本学が置かれている立場にふさわしい内容をもっていると自負している。

本年度の「外国における大学教育」に関する研究成果が、本学の実際のカリキュラムや学生の学習環境に反映され、より質の高い神戸大学の個性を生かした教育の実現が近い将来であることを願っている。